

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

音痴を治す (1)

音痴とはよく耳にする言葉ですが一体どんなことなのでしょう。昨年12月5日の日本テレビ「特命リサーチ2000 X」でもこのテーマがとりあげられ、その中で私が出演して「小脳モデル」について語っていたのをご覧になった読者もいらっしゃるかも知れませんが、もう一度復習してみましょう。

音痴とは辞書的な意味では「1. 生理的欠陥によって正しい音の認識と記憶や発声ができないこと。また、そういう人。俗には、音楽的理解の乏しいことや、そのため正しい音階で歌えないことをも言う。

2. 転じて (ある方面) に感覚が鈍いこと。」

これが、辞書的な意味ですが、大部分の場合「発声音痴」が問題になっているようです。

さらに、音痴は「真性音痴」と「仮性音痴」に分かれ真性音痴の場合かなり治療や教育は難しいと考えられています。

「真性音痴」が何を歌ってもそうなるのに対して、「仮性音痴」では、特定の条件下だけでそうなるのが大きなちがいです。

本稿「音楽教育とハイテク」ではまずこの「音痴」の問題からハイテクに取り組みたいと思っています。

これまでの1年あまりの連載で既に音とは何かとか、音感とは何かとか、音名と階名はどこが違うのか等のテーマに取り組んできましたがそれはこれから話の展開に必要な大前提であったわけで是非忘れずに時々バックナンバーをチェックして下さい。

耳鳴りを治すのにシンセサイザーを使う話をご存じでしょうか。私も右の耳に日によって違う高さなのですが高い音が「シー」という風に聴こえることがあります。「6点口 (私の場合) のその音をヘッドフォンに流してやり、その位相を少しずつ変えてやると見事ある位置でピタッと耳鳴りが止まります。最もこの原理は既に商品化されており、「Noise buster」という商品名で周囲の騒音を消すヘッドフォン (中国製) として数年前から市販されているものにも採用されています。或いはアクティブマフラーという音源付きの自動車マフラーでは位相反転した同じ音をマフラー内で発生させて音をほぼ完全に消しています。

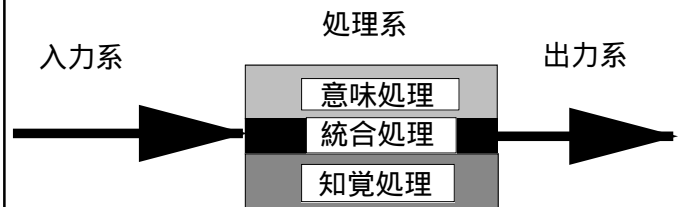
調律師が複数の弦を合わせる時に「ゼロビート」や「うなり回数」を利用します。

このように音の性質をうまく利用してやれば色々なことに応用ができそうです。

最近次に自分が弾くキーが光り、それを順に押せば素人にも演奏できるキーボードが発売されていますが、私の記憶が正しければ、25年ほど前アメリカでそのような鍵盤を使ったML装置が既にあったような気がしますし、MIEという電子キーボードを使った音楽教育のためのシステムや、ミラクルというコンピュータとキーボードをセットにしたピアノの自学自習ソフトでもそのようなインタラクティブな機能があります。

音痴を治すハイテクにはどのようなものがあるのでしょうか。音痴が起こるのには次の三つの状況が考えられます。

【音痴の原因】



まず疑われるのは「入力系」に異常がある場合です。「聴こえない」「特定の聴こえ方」がそれにあたります。

次は従来言われてきた「出力系」の異常です。器楽では発見されにくいことから「発声」に異常がある場合がこれの大部分のようですが、筋肉の訓練で治るのは「音痴」とは言わず、単に「未熟」であると考えられます。

問題は「処理系」に障害や異常があって、そのために正しく歌えないとか、正しく聴こえないなどの場合です。

三重大大学の弓場先生が発売された音痴を筋肉トレーニングで治す「音の出る本」では日常使わない筋肉の訓練と音名や階名によらない発声や模倣が中核になっています。

音や音程のイメージは「無音」の脳の中で「内的聴覚」として発生します。あたかも色や味のイメージのようにバーチャルな世界なのですが、それには必ず時間の概念が付随します。一対の音のどちらの方が高いかなども時間差を付けた方がよくわかります。同時に鳴るとどちらがどうなのかわからないからです。